（様式第１号）（第２条 16 号関係）

別紙

福祉サービス第三者評価の結果

１　評価機関

名称： コスモプランニング有限会社	所在地： 長野市松岡１丁目 35 番５号
評価実施期間： 平成 30 年 6 月 26 日から平成 30 年 10 月 17 日まで	
評価調査者（評価調査者養成研修修了者番号を記載） ０５０２２２、０５０４８２	

２　福祉サービス事業者情報（平成３０年　７月現在）

事業所名： （施設名）　長野市鬼無里保育園			種別： 保育所
代表者氏名：　市長　加藤　久雄 （管理者氏名）　保育・幼稚園課長　中澤　和彦			定員（利用人数）：　60 名（14 名）
設置主体：　長野市 経営主体：　長野市			開設（指定）年月日： 平成 7 年 4 月 1 日
所在地：〒 381-4301 長野県長野市鬼無里１６０－４			
電話番号： 026-256-2582			FAX 番号： 026-256-2582
ホームページアドレス： http://www.city.nagano.nagano.jp/			
職員数	常勤職員：　6 名	非常勤職員:　4 名	
専門職員	（専門職の名称）　名		
	・園長　1 名	・保育士　5 名	
	・保育主任　1 名	・給食調理員　3 名	
施設・設備の概要	（設備等）	（屋外遊具）	
	・乳児室　…　1 室 ・保育室　…　1 室 ・遊戯室　…　1 室 ・調理室　…　1 室 ・事務室　…　1 室 ・便所　…　3 室 ・会議室　…　1 室	・2 間鉄棒 ・滑り台 ・ブランコ（利用時に設置）	

３　理念・基本方針

長野市が目指す子どもの姿

（長野市乳幼児期の教育・保育の指針より）

かがやく笑顔で　げんきに遊ぶ　しなのキッズ

安心できる環境の中で、子どもが自分に自信を持ち、遊びや生活を通して
友だち等の人間関係を築いていく生き生きとした子どもを育てます。

【教育・保育の基本方針】

○健康な心と体を育てる
自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、健康で安全な生活を作り出す基礎を培う

○感じて、考えて、チャレンジする力を育てる
好奇心や探求心を持って人や物と関わり、試行錯誤しながら最後までやり通す力を育てる

○自信を持ち、自分を好きになる教育・保育の推進
満足感や達成感を得られる体験を通し、自信を得たり認められる嬉しさを感じることで更なる意欲へとつながる教育・保育を進める。

○人との関わりを大事にする教育・保育の実践
自分の思いや考えを伝えたり、相手の思いや考え受け止めたりして、人との関わりをもつことに喜びを感じる教育・保育の実践

○家庭や地域との連携
子どもの心の安定と健やかな成長のため、家庭での子育てを支え、地域における子育ち・子育て支援を行います

○保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領に沿った全体的な計画を作成し日々の教育・保育を実施します。

○鬼無里保育園　保育方針

・1人一人の子どもを温かく受け止め安心して自分の思いを表せるように保育します。
・恵まれた自然と関わる中で、感動する心、探求する心を育て、丈夫な体を作ります。
・異年齢混合保育と地域の人や高齢者との交流の中で、豊かな人間関係を育てていきます。
・家庭と連携し保護者と共に子育てをします。

○鬼無里保育園　保育目標

・「はい」とはっきり言える子ども。
・しっかり、挨拶ができる子ども
・ありがとうが言える子ども。

４　福祉サービス事業者の特徴的な取り組み

当鬼無里保育園は長野市が直接運営する28園(内休園1園)のうちの一つで、平成17年1月に旧鬼無里村が長野市に合併されて以降、長野市が運営している。

昭和27年旧鬼無里村に初めて季節保育所が開設され、昭和31年にはお寺を借用した中央(120人)、神社を借用した上里(88人)、稚蚕飼育所を使った両京(66人)の3季節保育所が、農繁期を主にした15日から20日間程度開設されたという。その後、昭和41年11月に3季節保育所が常設季節保育所となり、昭和42年4月に先ず中央保育所が正式に保育所となり他の2園も順次保育所として認可された。平成7年4月には3保育所を統合し鬼無里村立保育園として運営されてきた。

平成5年前身の中央保育所が高齢者生活福祉センターとの複合施設として現在の鬼無里保育園の建物に新築移転された経緯があり平成7年4月の3園統合時から現在の場所で運営がされ、平成17年1月に旧鬼無里村が長野市と合併したため、その後は長野市の一保育園として引き継がれている。

長野市鬼無里地区は長野県西北部、妙高戸隠連山国立公園に属する戸隠山の南西方面に広がり、長

野市と白馬村にまたがる標高 650m の中山間地で、また、長野市中心部に注ぐ裾花川の源で、裾花渓谷を西に向かい白馬村方面に車を走らせると谷が開け鬼無里盆地となり、周囲を荒倉山、虫倉山、戸隠表山などに囲まれている。鬼無里地区には飛鳥時代（あるいは白鳳時代）、鬼無里に遷都の計画があったとされる伝承があり、白髯神社や両京地区周辺の地名、旧跡には京都に由来する多くのものがあり、その最たるものが「鬼女紅葉」で北信州一円を舞台とし、会津、京都、鬼無里、戸隠、別所温泉などを舞台とする能の代表的演目「紅葉狩」としても有名で一般的な伝承については紅葉伝説となり、主人公の「紅葉」は妖術を操り、討伐される「鬼女」であるが、鬼無里における伝承では医薬、手芸、文芸に秀で、村民に恵みを与える「貴女」として描かれている。

現在、鬼無里地区の人口は 1,340 人ほどで平成 17 年の長野市合併当初の 2,180 人と較べると 800 人ほど少なくなっており、世帯数も 640 ほどで合併当初の 830 から減少しており少子高齢化がかなり進んでいる。そうした中、地域唯一の保育園として住民の方の関心も高く、地域の宝物として一人ひとりの子どもが大切にされている。

当保育園の東隣の地続きには鬼無里小・中学校があり、近くには長野市役所鬼無里支所や鬼無里診療所、ふるさと資料館、地場産品の直売所などもあり鬼無里地区の中心部を形成している。

当園では長野県が進めている「信州やまほいく認定制度(信州自然型保育認定制度)」の認定園として「豊かな自然と温かな地域の中で、子どもたちの”人生の根っこ”を育みます」という活動を推進しており、遊戯室と保育室の間の壁には当園を中心としたお散歩マップが掲示され、いくつかの散歩コースからは周囲の山々と裾野を流れる裾花川、田畑を眺めることができ、天候に関係なく、毎日、園外に出掛け、かつては海あるいは湖であったという鬼無里の立地を生かし、四季折々の自然や動植物に親しみ、また、地域の人々とふれあい様々な社会体験や生活体験をしている。

現在、当園には 1 歳児 3 名と 2 歳児 2 名のひよこ組、3 歳児 3 名・4 歳児 2 名・5 歳児 4 名のぱんだ組の二つのクラスがあり、それぞれの発達段階に合わせて作成された平成 30 年度「全体の計画(保育課程)」の四つの「保育方針」に掲げた「1 人一人の子どもを温かく受け止め安心して自分の思いを表せるように保育します」、「恵まれた自然と関わる中で、感動する心、探求する心を育て、丈夫な体を作ります」、「異年齢混合保育と地域の人や高齢者との交流の中で、豊かな人間関係を育てていきます」等に沿い、今年度から新しくした「『はい』とはっきり言える子ども」、「しっかり、挨拶ができる子ども」、「ありがとうが言える子ども」という当園の保育目標の実現に向けて職員が「ていねいなまなざし」で、見つめる保育に取り組んでいる。

また、当園では保護者の仕事と子育ての両立等を応援するためそのニーズに合わせ多様なサービスを提供しており、長時間保育や一時預かり、障害児保育、おひさま広場等を実施している。長時間保育は短時間利用者が時間外保育を必要とする際に利用するサービスで利用されている保護者がいる。また、一時預かりについても保護者の就労・保護者の疾病・保護者の育児に伴う心理的、肉体的負担の解消等による預かり保育を行うサービスで当園でも希望に応じて支援している。障害児保育は保育を必要とする心身に障害を持つ子どもの保育を行うサービスで園児との遊びや給食を通して子ども同士の交流を行い心身の発達を促すという内容になっている。おひさま広場は未就園児と保護者対象に園開放及び子育て相談を行うサービスでいつでも受け入れることができるようになっているが、地域の実情から参加者が少ないという状況が続いている。

当園では「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の目標「かがやく笑顔で　元気に遊ぶ　しなのキッズ」及び「子ども・子育て支援事業計画　～わくわく子育て　すくすくこども～」に沿いビジョンを明確にしており、今年度 2018 年度から 2020 年度までの中期計画として 3 年目に入る「信州やまほいく」の更なる拡充や長野市運動プログラムの充実などを掲げ具体的に進めており、地域の身近な自然や動植物などの環境を活かし、職員の資質の向上についても少数の職員であるからこそまさに精鋭にならんと自己啓発にも積極的に取り組んでいる。

５　第三者評価の受審状況

受審回数（前回の受審時期）	今回が初めて

６　評価結果総評（利用者調査結果を含む。）

◇特に良いと思う点

1）子どもの興味を豊かな感性へと繋げる保育

当保育園の保育指針の一つとして「恵まれた自然と関わる中で、感動する心、探求する心を育て、丈夫な体を作ります」とし、その一環として長野県が推奨している「信州型自然保育認定制度(信州やまほいく認定制度)」認定園として登録し、鬼無里という豊かな自然と穏やかな地域の人々と関わる中で、子どもたちの人生の根っこを育んでいる。

当保育園を取り巻く鬼無里地域の自然環境は豊かで、当園の事業計画の今年度の行うべきことの一つ、「保育内容の充実」の中にも「恵まれた自然と関わる中で『やまほいく』を行い『自己肯定感』が将来、身に付くようになるために感動する心、探求心、丈夫な体作りをしていく」としており、「信州やまほいく」の実践を通じて、こどもがその時々に感じ取ったり、気づいたりしたことを少しずつ発展させ、色々な考え方があることを自分の周りの他の子どもから自然に学び、自立や協調の態度を養っている。職員も自然保育の理念をしっかりと共有しており、子どもが自ら関わることで考える力が育っていることを感じている。

当保育園では春のふきのとう・つくし・のびろ・よもぎなどの草摘み、通称カエル池でのトノサマガエルの観察、馬とのふれあい、夏のカブトムシ幼虫捕り、木登り、川遊び、秋の栗・どんぐり・栃の実・からたち・ケンポナシとり、冬の雪遊び、氷づくり、アイスキャンドル、ソリ遊びなど、春夏秋冬、子どもたちが週に5時間以上戸外に出て遊んだり自然に関わる素材を使った工作などを行っており、時には雨の日にカッパを着て鬼無里地区ならではの恵まれた自然体験や生活体験をしている。

また、園舎内には爬虫類や川魚の飼育箱・植物が園内のあちこちに置かれ、いもり、かねちょろ、鈴虫、どじょうなどや地域の方々にいただいた野菜から発芽したさつま芋の芽、ピーナツ等の植物も育てられ、毎日散歩に出かけ季節の花に触れる中でわいた興味を食育にも活かし、子ども達が筍の皮や花で染めた草木染のランチョンマットや「箸置きはなんのためにあるのか」の疑問から生まれた同じく草木染の手作り箸置きを使い、食事を楽しんでいる。

更に、当保育園では地元鬼無里地区に自生するブナの実の帽子をかぶり、水芭蕉の洋服を着たキャラクター「エーテルさん」を昨年度から登場させ、園舎内に大きな絵姿を張り出し、手紙などの、やりとりを通じて自然教育などに活かしており子どもたちの想像力を養っている。

当保育園の2018年度からの3年間の中期計画でも2016年度に認定を受けた「信州やまほいく」を5年サイクルで更に拡充するとしており、長野市公立保育園全体としても力を入れつつある自然保育という中で、子どもたちの興味を引き出し、職員が全部に手を貸すのではなく「草木染めのバージョンアップ・たたたきぞめ」などを導入するなど、創意工夫と発展をさせながら、当保育園としての独自性に磨きをかけている。

2）地域の人々との交流

当保育園の保育指針の一つとして「異年齢混合保育と地域の人や高齢者との交流の中で、豊かな人間関係を育てていきます」と掲げており、「長野市乳幼児期の教育・保育の指針」の基本方針にも「『育ちを支える』家庭・地域との連携」が掲げられ、その細目として「地域交流活動の充実」が挙げられ、「地域住民が子育ての知恵等を生かして教育・保育活動に参加することで、地域とともに子育て支援を行う教育・保育施設を目指します」等としている。また、「長野市子ども・子育て支援事業計画」では地域の学校教育等への協力についての姿勢も明文化されている。

そうした中、当園の子どもたちは地域の様々な人々と交流しており、日頃から地域の高齢者に子どもたちのための畑おこしやイモの苗植え、そり遊びのゲレンデづくりなどに関わっていただいており、季節に合わせタイムリーな地域の情報などもいただき散歩コースに取れ入れている。

また、同じ建物内のデイサービスを訪問し高齢者と交流し、更に、地区で行われる「三世代いききまつり」で未就園児とゲームやダンスをしたり、地区の運動会に参加しダンスなどを披露している。民生委員や主任児童委員などを行事に招待し、園の実情を知ってもらうとともに園としても地域の子育てニーズを把握し対応している。

特に同じ建物2階のデイサービス「やすらぎ」との交流は、平成5年高齢者生活福祉セン

ターと保育所の複合施設としての開設から現在に至り、1階は保育所、2、3階は高齢者施設となり、3階は園庭（約500㎡）より三倍強の広さがある大ホールで、「やすらぎ」の所長ほか職員の理解のもと、雨天時の散歩、運動会等にも利用でき、また、「やすらぎ」を利用する高齢者の方々へ踊りや歌を披露してふれあい、世代間交流として社会とのつながりを育んでおり、今年5月には　長野県高齢者福祉事業協会から長年にわたり交流してきたボランティアとして感謝状が寄せられている。災害時にも同じ建物内の市社会福祉協議会や小・中学校、市役所支所との連携がとれるようになっている。

園で行われる夏祭りや運動会、クリスマス会等でも地域の人々とふれあう場を設けており、小学生との交流会や中学生の職業体験の受け入れや中学の家庭科の授業への協力などでふれあい、子どもと関わる楽しさを伝えている。

当保育園では地域の少子化が進んでいる中、地域の人々からそれぞれが持つ様々な力を提供していただき、人々の期待に答えられるように創意と工夫を凝らした活動に取り組んでいる。

3)各月の保育の「ねらい」の明確化

当保育園は3歳未満児5名、幼児9名の小規模の園で異年齢混合保育が実施されており、一人ひとりの子どもの生活や経験、発達過程などを把握し、適切な援助や環境構成ができるように配慮し、子どもたちが年上の子や年下の子と遊ぶ中で自分とは異なる思いを持つ子どもの存在に気づき、人には違いがあり、違っていて良いと理解する心を自然に育んでいる。

そうした中で「全体の計画(保育課程)」や「年齢別保育目標」を基に各月の保育の「ねらい」を未満児及び幼児として明確にし、毎月の園だよりに必ず掲載し保護者にも理解していただけるようにしている。

今年度、当保育園では園の保育目標を新たにし、地域環境や子どもの発達、特性などを生かした「『はい』とはっきり言える子ども」、「しっかり、挨拶ができる子ども」、「ありがとうが言える子ども」の三つを定め具体的に取り組んでいる。保育指針の改訂により保育課程が全体の計画に変わったが、子どもの実態に合わせ作成をしている。また、全体の計画に基づいた各年齢別の指導計画があり、年間目標と4期に分けられた「ねらい」、「内容」などが具体的に記載されており職員は実践している。全体の計画の評価も4期に分けて行い、また、年度末に見直しを掛け次年度の編成に活かしている。

鬼無里地区は他の周辺地域と同じく過疎化が進んでおり、当保育園でも小人数での保育が続いており、その特徴を生かし子ども一人ひとりの発達について理解し、それぞれの子どもの個人差に配慮しながら発達過程に応じて保育している。また、小規模園であるからこそ、子どもたち相互の関係づくりや互いに尊重する心を大切にし、集団における一人ひとりの活動を効果あるものにするように努めている。

4)職員のチームワークの良さ

現在、当園には3歳未満児と幼児の2クラス(組)があり、また、幼児については年齢別に「にじ(年長)」・「つき(年中)」・「ほし(年少)」の3チームに分け別に活動する時間を設けている。日中の職員は園長も含め5名(給食調理員除く)と、子どもの数、職員数共に少人数で、小規模園という特徴を生かし、一人ひとりの子どもの保育を振り返り発達の状況を共有し成長を見守り、園長、主任、職員、全員で子どもを育くむように双方向のコミュニケーションを取っている。また、毎週、火曜日には職員会が開かれ、更に、年1回、園長面談を行い、小規模園であるので必要な時には園長との相談を随時行うことができる。

職員のシフトは早番(7:30～)と遅番(16:30～18:30)になっており、代替保育士(公休・年休等)、休憩パート保育士も園長が市保育・幼稚園課と連絡を取りながら確保し、職員の仕事と生活の両立という面で休暇取得の促進、短時間労働の導入、時間外労働の削減などに取り組んでいることから、育児や介護、療養などの状況に応じて休暇が取得できるようになっている。

基本的に各クラスは一人担任であるが、幼児のぱんだ組には加配の職員が就いており、園長や主任が職員の研修時にはフォローに入り、また、昨年度、幼児を担当していた職員が今年度未満児の担当になるなど、クラス担任・非担任にかかわらずクラスの垣根を超えた園児への対応、保育への支援体制がフレキシブルに行えるようになっており、職員間の密な連携へとつながっている。

保育士としての専門性を高めるための内部研修や市としての研修、復命での外部研修について

も職員同士お互い融通し合い日程を調整し、職員一人ひとりが課題を持って主体的に学ぶための研究会への自主参加についても互いに支援・協力し合っており、職員同士の信頼関係を築くとともに、共に学び合う環境を醸成することで当保育園の活性化を図っている。

◇特に改善する必要があると思う点

1) 小・中学生との更なる交流

今年度の全体の計画(保育課程)の中の子どもの現状として「子ども同士の関わりの固定化や、社会性につながる集団での葛藤経験の希薄化が見られる」としており、小人数の保育の良い面と裏腹の面を感じつつ職員は様々な取り組みをしている。

現状、当保育園と小・中学校とは至近距離にあり親近感と期待感を持ち、さまざまな活動を通じて意欲的に交流しており、当保育園の事業計画にも「小学校との連携の計画」として小・中学校や地域のイベント、園の行事等で小学生や中学生とふれあう場を持ち、また、特に、年長児は小学校への入学を控えたアプローチカリキュラムを基に、学校訪問で先生と挨拶を交わし親しみを持ち、校内施設を見学することで保育園との違いに気づき、卒園児や兄姉、地域の小学生を見つけ安心感と期待感が持てるようにしている。

更に、当保育園では同じ公立の、隣のとがくし保育園とも年に数回交流し、その集団活動から仲間として必要なことを肌で感じ取り、仲間の一員としての自覚が生まれ、友達への親しみも感じ、お互いに信頼感を高めている。

立地的な課題でもあり当保育園の入園予定数については極めて厳しい状況下にあるものと思われるが、今後も引き続き、更に小・中学生との交流の機会を増やし、自己を十分に発揮できる下地を培っていくことを期待したい。

2) 園庭の遊具について

当保育園では「信州型自然保育(信州やまほいく)」に積極的に取り組んでおり、現在、長野県が認定する普及型(他のプログラムと一緒に自然保育にも積極的に取り組んでいる活動、一週間で合計 5 時間以上、屋外を中心とした体験活動が行われている)の認定園であるが、特化型認定園(質、量ともに自然保育に重点を置いて取り組んでいる活動、一週間で合計 15 時間以上、屋外を中心とした体験活動が行われている)に近い活動をしている。

当保育園では「遊び」に用いられものをすべて「遊具」として広く捉えており、玩具、絵本、楽器とともに動植物も含めている。虫の歩き方を観察したり、魚の形や動きを眺めたり、小動物や植物にふれて感触を高めることが子どもにとっておもしろく、また、美しい色・形などで美的な感覚や快適な気持ちをもたせているとして、興味を起こさせ、遊びを発展させるものということで動植物を捉えている。

そうした点では当保育園の周りには子どもの豊かな発想や職員の創意工夫によって「遊具」となり得る動植物が沢山あり、天然素材や材料に恵まれている。また、幼児の主体的な遊びの環境として園庭は、築山のある場、起伏のある場、樹木のある場、水のある場であり、それらが複合的に構成され、遊びのきっかけや拠点となって多様な遊び場を提供している。

子どもが何かをするということは五感を働かせて体験することであり、また、学習することでもあり、まさに生きているということである。大人から見たら無駄な「遊び」にしか見えない行いが、子どもにとっては脳の機能を高める重要な体験であり学習となっている。

1995 年に改定される前の幼稚園設置基準では「すべり台」、「ブランコ」、「砂場」を備えなければならないとされていたが、現在はその制約はなく、多様な固定遊具が開発されており、独自の遊具の設置が望ましいとされている。

固定遊具については体全体を動かす運動的な道具として用いつつ、友達といっしょに遊ぶことで社会性を身につける機会にもなるもの思われる。可能であれば、安全面に配慮された遊具を整備されていくことを期待したい。

７　事業評価の結果（詳細）と講評

共通項目の評価対象Ⅰ福祉サービスの基本方針と組織及び評価対象Ⅱ組織の運営管理、Ⅲ適切な福祉サービスの実施（別添１）並びに内容評価項目の評価対象Ａ（別添２）

８　利用者調査の結果

長野県福祉サービス第三者評価事業評価結果取扱要領第２条第１項の規定により、有効回答者数が 10 人未満のため、非公開とします。

９　第三者評価結果に対する福祉サービス事業者のコメント

（平成３０年１０月１１日記載）

今年度、長野市公立保育園の中で最初の第三者評価ということが急に決まり慌てたことと、不安とが入り乱れ、最初は全職員どうしたらよいかわからなかったが、評価担当の方が話しやすく、まず、第一の不安関門は突破できた。その後も、自園を好意的に、良心的に見ていただき「気負いなく普段の保育園を見てもらおう」という平常心で訪問調査を受けることができた。

また、保護者は大切な「宝」である子どもを園に託しているので、いろいろな思いがあることもアンケートで再認識できた。現状、すぐ取り組むことができないと思われるような意見・要望などをいただくこともあるが、これからもしっかり傾聴に努め、園の実情を理解していただきつつ可能な限り取り組み、特に、安心、安全の保育を心がけていきたいと思う。

保護者アンケートの中の「セキュリティ―が心配」という声を受け止め、すぐに安全対策として施錠をしたが、この自然豊かな土地柄から、園に出入りしていただいている気持ちの優しいお年よりへの配慮が必要なことと防犯面ではどこからでも入って来れる立地条件などもあり、施錠は＋、－の両面が出てくる気もして難しいと感じている。今後、見守りなども含め色々と工夫をしていきたい。

今般、評価を受けることで職員全体のサービスの質の向上にもつながり、また、普段の保育に対しても、職員全員がこの小さな保育園であっても、保育士が張り切っている、楽しく保育しているという振り返りができ、これで良いのだという自己肯定感が生まれつつある。

沢山の好評価、高評価をしていただいたことを今後の励みにし、より良い保育に取り組んでいきたい。